

二〇一七年度

トキワ松学園高等学校入学試験

**国語第一回一般** 問題用紙

受験番号

開始と同時に受験番号を  
書き入れなさい。



次の①～⑤の——線のカタカナを漢字に直し、⑥～⑩の——線の漢字は読み方をひらがなで答えなさい。

- ① 人工衛星はキドウをはずれた。
- ② 投稿が新聞にケイサイされた。
- ③ 社会フクシは大きな問題だ
- ④ 研究でイチジルしい成果を上げた。
- ⑤ 記念写真をとる。
- ⑥ 抑揚をつけて話す。
- ⑦ 緊迫した空気を打ち消す。
- ⑧ 人生の岐路に立つ。
- ⑨ 緊急時は速やかに行動してください。
- ⑩ お年寄りに席を譲る。

次の文章を読んであとの問いに答えなさい。(問いの下の数字は、本文での行数を示します。)

「いまの自分を変えたい」という人が増えている。

こころをこころで変えることはむずかしい。手つ取り早いのは、行動を変えることだ。

人間の行動は、「動詞」の集積である。そのことをもつと意識して、自分を活性化させ、スイッチ・オンする「動詞」を持つと、という趣旨<sup>1</sup>で『つぶやく』時代にあえて「叫ぶ」——一瞬で変わる言葉のスイッチ<sup>2</sup>12』を書いた。

ある行動が熱心に行われているときには、その行動を指す言葉も実態感が強い。逆に日常的にその動詞が行われなくなると、それを表現する言葉もすたれていく。

A

最近ではタオルなどを「絞る」ことのできない子どもがいる。家でも学校でも雑巾がけをしなくなった。洗濯物を手で絞ることもない。「絞る」動作が生活のなかからどんどん減り、両手でぎゅつとねじって絞り込む動きを知らなくなっている。「絞る」という動詞はもはや風前<sup>2</sup>の灯<sup>1</sup>だ。

日本人が帯や禪<sup>ふんじし</sup>を締めなくなつて久しい。「結ぶ」ことも苦手になつている。鉛筆を「削る」ことも、マッチを「すつて」火をつけることもない。刃物を「とぐ」こともしなくなった。「洗うことですよ」と、米を泡だて器<sup>注1</sup>で攪拌<sup>かくはん</sup>する人もいる。

① 言葉がすたれ、その動作がもたらしていた身体感覚が失われると、そこから派生した比喩表現も実感が湧かなくなる。

タオルを絞れない人は、ものを絞れないくらいだから、知恵やアイデアを「絞る」こともできない。ひもをきちんと締めて結ぶことのできない人は、気持ちを「引き締める」ことも、人と縁を「結んでいく」こともできない。米をとげな

14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

い人は、感覚を「とぎすます」こともできない。

からだの動きと直接的に結びついた動詞が身の回りからどんどん減ってしまったことと、現代人が「生」を実感しにくくなったことは無関係ではない。

動詞のもっている意味を、いま一度見つめなおし、自分に足りないもの、あるいはこういう要素を身につけたいと思うものを意識して生活する。自分と（ 1 ）が高い動詞を見つけ、味方につける。

何かいやなことがあったとき、私はプールに泳ぎに行く。ゆっくりとしたペースでしばらく泳ぎ、疲れたらコースをはずれて仰向けになってプカリとからだを水に浮かせる。こころは沈みがちでも、からだはいつものように浮く。そしてまたコースに戻ってひとしきり泳ぐ。憂鬱ゆううつな思いを水に流して泳いだり浮いたりしているうちに、Xも軽やかになってくる。

ジムで、いつものより負荷重量を高くしてレッグプレスをやることもある。脚に力を入れて踏んばると、下半身に力が見なぎって、「こんな程度のことでは揺るがないぞ！」と自信が舞い戻ってくる。

思考が行き詰まったなと感じたときは、頭を思いっきり揉もむ。自分の脳の血行をよくし、思考の滞りを払拭するつもりで、頭皮を揉みほぐして柔らかくする。そして深呼吸して息を入れ替える。

私の場合、「泳ぐ」「浮く」「踏んばる」「揉む」、こんな動詞で心身を整えることができる。

人によってフィットする動詞は違う。これを「マイ動詞」にしよう意識すると、生活の構えが変わってくる。自分は何が得意で、どういう場面で実力を発揮できるのかがわかってくる。すなわち自分の闘い方がわかる。だから強くなれる。人間的な自信も湧いてくる。それによって対人関係も変わってくる。

動詞は、その人の生きる姿勢に投影されやすい。

たとえば包容力のある人は「包む」<sup>②</sup>身体性を持つている。どんな形状のものもうまいこと「包み込んでしまう」風呂敷のような柔軟さを持つている。この意見だけが正しいとか、これではダメだ、という考え方をしない。自分とは見解が違っても人の話に耳を傾けて「聞く」ことができ、相手を「受け容れる」ことができる。行動や考え方に「包む」という動詞の持つ特徴が自然にあらわれて、その人のひとつのスタイルになっている。

「名は体をあらわす」という言葉があるが、私は B 「動詞は体をあらわす」と考える。

自分のスイッチになる「動詞」をたくさん持っている人は、自分の Y をベースにして心地よく生きる術すべを知っている人だ。

<sup>③</sup> 生き方のスタイルは動詞で変わる。人生は動詞次第だ――。

一般的に音や声を耳で感じ取るときには「聞く」が使われる。

それに対して「聴く」は、意識的に聞こうとするとき、注意深く耳を傾けるときなどに用いる。音楽、講演、講義をきくときは「聴く」になる。

C、「聞き入る」「聞きただす」「聞きほれる」<sup>③</sup>「聞き耳を立てる」など複合語の場合は、一般に「聞」の漢字を使うことが多い。

「訊きく」は何かを尋ねるとき、質問をするときに使う。現在は常用漢字外の漢字になっているので、新聞などの表記では「聞く」とか、ひらがなで「きく」とあらわされる。

注<sub>2</sub>まさおかしき 正岡子規の俳句に「いくたびも雪の深さを尋ねけり」という一句がある。注<sub>3</sub>せきついで 脊椎カリエスが進行し、出歩くどころか身動きもままならず、子規の世界は「病牀六尺」、注<sub>4</sub>びよしょうくしやく ふとんの上だけになってしまふ。外は雪だと聞いても、雪景色を見に窓

辺に行くことすらできない。家人や見舞いに来てくれた人に、何度も繰り返し「雪はどうだ？ どのくらい積もったか？」と尋ねる。「訊く」事だけが外の様子を知る手立てなのである。

「聞くは一時の恥 聞かぬは一生の恥」ということわざがあるが、あれは意味的には「訊く」ことを指している。こんな事も知らないのかと思われるのを恥ずかしがってそのとき訊かないと、訊くチャンスを逸して一生知らないままになる。知らないことは恥ずかしがらずに訊くことだという警句だ。

ほかに「効く」や「利く」が使われることもある。「パンチが効く」とか「薬が効く」ように効果が発揮されるときは「効」を、「気が利く」とか「酒が利く」のように働きがある、役に立つというときは「利」を用いる。

「パンチが効く」も「薬が効く」も、「酒が利く」も、自分に作用があったということだ。「効く」や「利く」も含めて、「きく」とは自分の体に作用を及ぼさせることではないだろうか。

⑤ からだを開け放して受け入れ、その作用に反応する。

注<sub>5</sub> 臨床心理学者の河合隼雄先生は、相談に来るクライエントから何かを無理やり聞き出そうとはしなかった。相手から言葉が流れてきたら、それを聞く。

相手よりも下、川下にいないと流れてこない。「こうしなさい」「ああしなさい」と言うのは川上からの申すことだ。

この川上というのは、上から目線のこと。例えば「自由に話してごらんなさいよ」というのも、川上からものを言うスタンスだ。河合先生は、相手が子どもでも、川下で聞くようにしていたそうだ。

はじめのうち、河合先生も相手の言葉にしがみついていた。相手が何を言うかを必死に聞こうとし、それに答えようとしていたという。

D、「聞く」とは「言葉を受けとめること」なのだ気がついた。相手が言ったことに真正面から答えて、アドバイスする必要はない。相手はそれを望んでいるのではなくて、話の内容を肯定しようと否定しようと、「言葉を受けとめてもらった」と思えばそれでいいのだ、と思うようになられたそう。

長くやっているうちに修練でふわーっと聞けるようになったという。

アメリカの臨床心理学者カール・ロジャースの心理療法にも「アクティブ・リスニング」という方法がある。傾聴と訳される。相手に対して指示をしない非指示的療法。すべてを受け入れる聞き方だ。

<sup>注8</sup>セラピーの仕事をしている人でなくてもそういう姿勢が必要だ。

「聞く構え」のできている人に一方的に話しまくるような人はいない。自分が話すことよりも、聞く方を優先させることができる。

言いたいことがあっても、相手が話したそうにしていたら間合いを見計らって黙る。つまり、聞く（2）を持っている。「聞く」をベースにして、タイミングが合えば「話す」。その切り替えが自然にできる人はコミュニケーション上手だと思う。

「聞く」という行為は自分を開放することだ。自分のなかに、相手が投げかけてくれる言葉を受け入れるスペースを空ける。リラククスして、相手に任せる意識がないと、聞き上手にはなれない。



自分にスペースを空けて、相手の言葉を受けとめる。

E

会話の波に乗って、対話の海を臨機応変に行き来する。

そんな聞き方ができたら理想的なのだが、それがむずかしいという人は、とにかく相手の言葉に反応することだ。

「目をみる」「うなづく」「相づちを打つ」

最低限この三つをきちんとやっている、聞く気のある人だということはおわかってもらえる。

聞く姿勢の基本なのだが、<sup>5</sup>存外、<sup>9</sup>これができない人が多い。なぜなら、学校生活でこうした「聞き方」をしてきていないからだ。

学校の授業では、「きちんとすわって静かに先生の話を聞きましょう」という方向のことばかり言われる。「人と話をするときには相手の目を見ましょう」「相手の言葉にうなずいたり相づちを打ったりしましょう」ということを教えない。

結局、社会に出てから、そうしたほうがコミュニケーションがスムーズにいくことを知るのである。しかし大人になってからというのは、なかなか習慣が変わりにくい。本当は小学校の段階から、この習慣を身につけるようにしたほうがいいと私は思っている。

(出典 齋藤孝『人生は動詞で変わる』『つぶやく』時代にあえて「叫ぶ」)

- 注1 (11) 攪拌……かきまぜること。
- 注2 (49) 正岡子規……慶応三(一八六七)〜明治三十五(一九〇二)。日本の俳人、歌人、国語学研究者。
- 注3 (49) 脊椎カリエス……結核菌が脊椎(背骨)へ感染し、息をすることも出来ないほどの激痛に見舞われる病気。
- 注4 (50) 病牀六尺……一八〇センチ(六尺)の布団の上で寝たきりになった状態のこと。
- 注5 (61) 臨床心理学者……心の悩みや苦しみを抱えて相談にくる人を援助するために、精神障害や不適應などの研究をする学者。
- 注6 (61) 河合隼雄……昭和三(一九二八)〜平成十九(二〇〇七)。日本の心理学者。
- 注7 (61) クライエント……英語で依頼人のこと。特にカウンセリングなど心理療法を受ける人のことをいう。
- 注8 (74) セラピー……薬や手術などによらない心理療法や物理療法。

問一 〜〜線1〜5の言葉の本文中での意味としてもっともふさわしいものを、それぞれ次のア〜エの中から一つ選ん

で記号で答えなさい。(4、9、45、55、88)

1 趣旨(4)

- ア 言おうとしていることの目的や理由
- イ 言おうとしている最も中心の事柄
- ウ 言おうとしていることの世間での意味
- エ 言おうとしている内容の優れている点

2 風前の灯(9)

- ア めずらしくて貴重であること
- イ あいまいではつきりしないこと
- ウ 意味が分からなくなっていること
- エ 今にも滅びそうであること

3 聞き耳を立てる(45)

- ア 注意を集中してよく聞こうとする
- イ 我を忘れてうっとり聞き続ける
- ウ 感心して納得しながら聞き取る
- エ 内容をよく考えながら耳を傾ける

4 警句 (55)

- ア 危険を知らせ、注意を促す強い言葉
- イ 短く巧みな表現で、真理を鋭くついた言葉
- ウ 道徳的な意味を、多くの人に広く伝える言葉
- エ 昔から伝わる、日本特有の言葉

5 存外 (88)

- ア あらかじめ思っていた通りになること
- イ 当然のことなのに忘れてしまいがちなこと
- ウ 思っていたのと程度や様子が違うこと
- エ 誰もが思っているような結果になること

問二 空欄 A E に入れるのにもつともふさわしい言葉を、次のア～カの中からそれぞれ一つ選んで記号

で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。(7、37、45、68、84)

- ア そして
- イ たとえば
- ウ 結局
- エ むしろ
- オ しかし
- カ ただし

問三 —— 線①「言葉がすたれ、その動作がもたらしていた身体感覚が失われると、そこから派生した比喩表現も実感が湧かなくなる」とあるが、「そこから派生した比喩表現」の例を本文中から二つ抜き出しなさい。(12)

問四 空欄(1)に入れるのにふさわしい言葉を、次のア～エの中から一つ選んで記号で答えなさい。(19)

ア 行動性      イ 対立性      ウ 柔軟性      エ 親和性

問五 空欄 X、Y に「こころ」「からだ」のどちらかの言葉を入れなさい。(22、38)

問六 —— 線②「『包む』身体性」とあるが、それを具体的に言いかえた部分を本文から三十五字以内で抜き出しなさい。(句読点を含みません)(33)

問七 —— 線③「生き方のスタイルは動詞で変わる」とあるが、それを具体的に説明した部分を本文から抜き出し、最初と最後の五字で答えなさい。(句読点を含みません)(40)

問八 —— 線④「何度も繰り返し『雪はどうだ?』どのくらい積もったか?』と尋ねる」とあるが、なぜそのように「尋ねる」のか。本文中の言葉を使って説明しなさい。(51・52)

問九 —— 線⑤「からだを開け放して受け入れ、その作用に反応する」とあるが、河合隼雄かわい はやおはどのように実践しているのか。次のア、エの中から一つ選んで記号で答えなさい。(60)

- ア 無理やり話をさせるのではなく、相手が自由に話したことにタイミングよくアドバイスするようにしている。
- イ 上から目線にならないように気をつけながら話をよく聞き、相手が望んでいる答えを与えるようにしている。
- ウ たとえ相手が子どもであっても川下から必死になって話を聞き、話を真正面から受け止めるようにしている。
- エ こちらから指示するのではなく相手から言葉が流れてきたら、それを受けとめるように聞くようにしている。

問十 —— 線⑥「川上からの申すことだ」とあるが、それはどのようにすることか。本文中の言葉を使って説明しなさい。(63)

問十一 —— 線⑦「相手の言葉にしがみついていた」とあるが、それはどのようにしていたということか。本文中の言葉を使って説明しなさい。(66)

問十二 空欄 ( 2 ) に入る漢字一字を答えなさい。(77)

問十三 —— 線⑧「会話の波に乗って、対話の海を臨機応変に行き来する」とは、どういうことのとえか。本文中の言葉を使って説明しなさい。(84)

問十四 ——線⑨「これ」は何を指しているか。本文中の言葉を使って説明しなさい。(88)

問十五 次のア～オの中から本文の内容に合致するものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア からだの動きと直接的に結びついた動詞が身の回りから減ってきているが、自分を変えるためには、それらの動詞をいま一度見つめなおし、どんなものであっても取り入れていかなければならない。

イ 動詞はその人の生きる姿勢に投影されやすいので、どんな形状のものでも包み込んでしまうような柔軟さを持ち、自分とは見解が違う人の言葉にも耳を傾けて聞き、受け入れていく必要がある。

ウ 言いたいことがあっても、相手が話したそうにしていたら必ず黙って相手の言葉を受け入れ、相手の話が終わるタイミングで自分から話すようにすれば、人間関係もうまくいくようになる。

エ コミュニケーション上手になるためには、自分のなかにスペースを空けて相手の言葉を受け入れ、一方的に話しまくるようなことはせず、聞く方を優先させる姿勢を持つようにするとよい。

オ 小学校の段階から、ただきちんとすわって静かに先生の話を聞くという教育がおこなわれているため、相手の目を見て話したり、うなずきながら話を聞いたりすることを理解できない社会人が多い。

